

「ふあってん！」

横尾
千智

登場人物

人見真希（42）主婦。

小桜奏（25）かなえ真希の隣人。イラストレーター。
人見篤（45）真希の夫。会社員。

小桜亨（7）奏と腹違いの弟。

小桜圭吾（17）奏の義理の母親の連れ子。

老婆1（70）

少女1（5）

宅配便業者

○病院の待合室

長いベンチソファに、座っている人見
真希（42）。

冬物のコートを着込み、買い物袋を抱
えている。

真希と一人分あけて座っている少女1
（5）と、その隣の老婆1（80）

少女1の手には、一匹赤い金魚の入っ
た金魚袋。

少女1「おばあちゃん。金魚さん、なんか言
ってる」

老婆1「お腹すいたなあて？」

首を横に振る少女1。

少女1「一体これからどこに連れてかれちゃ
うんだろうーって」

少女1をちらっと見る真希。

少女1「お父さんやお母さんや友達と引き離
されて、どこに行くの？って、心配してる」

掠れた笑い声を立てる老婆1。

金魚袋を覗き込む少女1。

少女1「大切にしておあげますからねー」

真希「…」

金魚袋の中の金魚を見つめる真希。

受付から顔を出す看護師。

看護師「人見さん。診察室にどうぞ」

我に帰り、立ち上がる真希。

○マンション・全景（夕）

新築で小綺麗な外装。

○同・人見家・ダイニングキッチン（夕）

2LDKの室内。

生活感はあるが、雑多ではない。

帰宅してくる真希、買い物袋をテーブルに置く。

手早く上着と手袋を取る真希、左手薬

指には結婚指輪。

買い物袋から、食品を取り出す真希。

帰宅してくる背広の人見。

人見「疲れた〜」

真希「おかえり。早かったね」

人見「腹減ったー。飯、すぐ食える？」

真希「ごめんなさい。パートの後に病院寄つたら遅くなっちゃって」

大げさに深いため息をつく人見。

人見「（ぼやき）言ってくれりゃ、なんか買って帰ったのに」

真希「急ぐから。何食べたい？」

人見「うどんとかでいいよ。早いし」

台所に立ち、エプロンをする真希。

マフラーやネクタイを外して、コート

と一緒にソファアに投げ出す人見。

人見「どっか悪いの？」

真希「え？」

人見「病院って、風邪？」

真希「インフルエンザの予防接種。朝も言ったじゃない。あなたも受けてねって」

人見「来週くらいに予約しといて」

真希「朝言ってくれたら、今日ついでに予約しといたのに」

人見「なんだよ。電話するだけじゃん」

ソファ―にどかっと座る人見、テレビをつける。

ため息をつく真希、床に散らばる人見の衣服を集め始める。

マフラーを手に取る真希。

真希「…ねえ。このマフラー、どうしたの？」

人見「ん？」

真希「結構いいブランドのじゃない？」

人見「あー。お袋がくれた」

真希「実家に帰ったの？いつ？」

人見「先週、食事ついでに買い物したんだ」

真希「ふーん…」

人見「お袋が、そろそろ正月のこと相談した

いから連絡よこせて言ってたよ」

真希「え？それいつの話？」

人見「だから先週」

真希「なんでもっと早く言ってくんないの！」

人見「別にまだ一二月の初めだし、急ぎじゃ

ないじゃん」

何か言おうとする真希。

インターホンが鳴る。

テレビを見ている人見。

人見「誰か来たよ」

何か言おうとして飲み込む真希。

○同・同・玄関口（夕）

やってくる真希、手にマフラーを持っているのに気づく。

どこかに置こうとするも置き場がない。

再度、鳴るインターホン。

仕方なくパッとマフラーを首に巻く真

希、チェーンをしてドアを開ける。

廊下に立つ小桜奏（25）。

奏「どうも」

真希「こんにちは」

奏「私、隣に引っ越して来た小桜と申します」

真希「あ、そうなんですネ」

慌ててチェーンを外す真希。

真希「（微笑み）初めまして人見です」

仏頂面の奏。

奏「自転車、邪魔なんですけど」

真希「え？」

奏「あれ、御宅のですよね？」

奏の視線の先には、廊下に住輪されて
いるマウンテンバイク。

真希「あ：主人が通勤に使ってまして：」

奏「廊下は公共スペースのはずです。荷物も
くるので、堂々と置かれると困ります」

真希「：すいません。すぐどけますから」

いそいそと廊下に出る真希、マウンテ
ンバイクのハンドルに触れようとした
時、バチッと静電気が起きる。

真希「：っ！」

思わず手を引っ込める真希。

奏「どうかしました？」

真希「：いえ。静電気が」

愛想笑いをして、マウンテンバイクを
奥のスペースへ移動する真希。
真希の様子を見ている奏。

奏「怒ってます？」

真希「…は？」

一瞬表情が崩れるも、すぐに笑顔を取り戻す真希。

真希「驚いただけです」

俯く真希、無表情。

○同・ダイニングキッチン（夕）

戻ってくる真希、マフラーはしていない。

テレビを見ている人見。

人見「宅配？」

真希「お隣さん。引っ越して来たんだって」

人見「へえ。どんな家？子供いた？」

真希「さあ…。今のは20くらいの女の子だったけど」

人見「ガキがいなるといいな。俺、眠りが浅いから、隣の家の夜泣きとかでも起きちゃうんだよ」

真希「…」

思い出したように軽く振り返る人見。

人見「あ、明日、宅配くる予定だから」

怪訝な顔になる真希。

真希「また時間指定しなかったの？」

人見「だってお前家にいるだろ？」

真希「…」

テレビに向き直る人見。

真希「高かった？」

人見「何が？」

真希「その届くやつ！」

人見「…そこそこ？」

真希「大きい買い物の際は相談してって言っ

てるのに…」

人見「うち子供いないんだし、そんなピリピ

リケチんなよ」

手が止まる真希、屈んでシンクの下

戸棚を開ける。

棚の中には、米櫃や鍋、調味料。

豚の形をした陶器の貯金箱、招き猫の

ように立っており、大きさも人の頭

2つ分ほどある。

そっと豚の頭を撫でる真希。

真希「（小声）：待っててね」

振り返らず声をかける人見。

人見「なあゝめしまだかかる？」

真希「すぐだから！」

豚の横にあった鍋を取り出し、戸棚を

閉める真希。

○同・小桜家・ダイニングキッチン（夜）

簡易的に置かれた家具と、段ボールの山。

タオルケットをかけて、ソファアに座っている奏。

アイパッドにタッチペンシルで、森の背景イラストを描いている。

アイパッドの画面が、「実家 着信」に変わる。

通話を拒否する奏。

再度、鳴り出す着信、拒否する奏。

着信がまた鳴り出す。

ため息をつく奏、コンビニ袋からサン
ドイッチを取り出そうとして、バチっ
と静電気が起こる。

奏「っ！」

手を引っ込める奏。

奏「…静電気か」

手の指先を見つめる奏。

窓の外で雷の音がする。

顔を上げ、アイパッド片手に窓の方に
行く奏。

奏「雷雨…」

窓にポツポツ当たり始める雨と、時折
光る雷鳴を見つめている奏。

○同・人見家・ダイニングキッチン（夜）

外で聞こえる雨風、雷鳴の音。

シンクに置かれた夫婦茶碗や丼、鍋。

廊下の先から、人見が風呂に入ってい
るらしい気配が聞こえてくる。

テーブルに座り、メモ帳に何か書いている真希。

書き終わると、メモ帳から丁寧に紙を剥がし、傍に避ける。

テーブルには、同様のメモが数枚、几帳面に並べられている。

(メモの内容)

「予約の電話くらい自分でしろ！」

「うどんでもいいなら自分で作れ！」

「ネットで買い物ばっかしてんじゃねえ！」

「宅配の日付指定くらいしろ！」

新たなメモにペンを走らせながら、ブツブツ呟く真希。

真希「私だって、あんな自転車、クソ邪魔、なんだよ」

メモを剥がす真希、次のメモを書く。

真希「40の、おっさんが、ママに、マフラー、買って、もらってんじゃ、ねえ…！」

風呂から上がったらしい物音。

並べていたメモの紙を、束ねて集める

真希。

メモを手にしち上がる真希、台所まで足早に行き、シンク下の戸棚を開ける。中からそっと豚の陶器を出す真希。

豚は口に小指サイズの穴があいている。穴の中にメモを投函する真希。

鼻歌交じりにやってくる、下着にバスタオルの人見。

豚の陶器を戸棚の中に戻す真希。

人見「でたぞ」

真希「はい」

戸棚を閉める真希、立ち上がる。

シンクの食器を拭き始める真希。

人見「なんだよ。まだ片付けてなかったのか」

冷蔵庫から牛乳パックを出す人見。

真希「家計簿つけたの」

人見にコップを渡してやる真希。

人見「ママだよなあ」

開けっ放しの冷蔵庫の扉を閉めてやる真希。

牛乳を注ぐと一気飲みする人見。

片付けが終わり、手を拭く真希。

真希「（独り言）よし、終わり…」

シンクの横に、飲み終わったコップと牛乳パックを置く人見。

人見「俺、歯磨いて寝るけど、お前もさっさと風呂入れよ」

さっさと寝室に行く人見。

ちらっとドアが閉じるのを見る真希。

シンクの横には、牛乳の痕跡がしっかりと残ったコップ。

真希「…」

しゃがむ真希、シンク下の戸棚を開けようとする。

寝室から出てくる人見。

ぎくつとする真希。

パジャマ姿でふらふら出てくる人見、浴室の方へ行ってしまふ。

ため息をつく真希、立ち上がると牛乳のコップを洗い始める。

歯ブラシをくわえて戻ってくる人見。

人見「明日は残り湯洗濯の日だろ？先週みた
いにうっかりお湯流すなよ」

コップを丁寧にふきんで拭う真希。

真希「…あれさ。トイレマットとか便座カバ
ーだけでしょ？毎週洗わなくていいんじゃない
」

歯を磨きながら話す人見。

人見「何言ってるんだよ！トイレの床の雑菌っ
てやばいんだぞ？週1は必須だろ」

真希「気にしすぎじゃない？：衣服と分けて
2回洗濯すると、時間もかかるし：」

ペッと、シンクに歯磨き粉を吐き出す
人見、真希が拭いたばかりのコップを
手に取ると、水を入れうがいをする。

人見「仕方ないだろ？残り湯で服とか下着洗
うなんて、きたねえじゃん」

真希「：なら、トイレマットも月に一回くら
い普通に洗濯すればいいんじゃない？」
深くため息をつく人見、呆れたように、

人見「専業主婦が、週1の洗濯くらいで文句
言うなよ」

真希「…洗濯は毎日してるよ」

人見「せっかく節約のために給水ホース買ってやったんじゃない」

真希にコップを渡し、真希の両肩に手をかける人見。

人見「そもそも、うちには子供がいないから、
トイレマットは週1で許されてるんだぞ？」

真希「…」

人見「ガキは金もかかるし汚すけど、いないから俺たち自由に金が使えて、お前も楽で
きるんだろ？」

真希「…そうだね」

笑顔になる人見。

人見「じゃ、俺寝るから、お前も夜更かしす
んなよ」

寝室に入ってしまう人見。

×××

廊下の光だけで薄暗い室内。

テーブルの上に新たなメモ、「ガキは
てめーだ！」と書かれている。

ソファアでチョコレートやクッキーを
貪るように食べている真希。

ローテーブルには、くしゃくしゃのチ
ョコやクッキーの包み紙。

時計は深夜2時を少し過ぎている。

○同・同・寝室（朝）

ダブルベッドで眠る真希と人見。

5時、スマホのアラームが鳴る。

アラーム音は赤ちゃんの泣き声。

アラームを止める真希、起き上がる。

横で全く気付かず、いびきをかいて眠
っている人見。

人見をじっと見下ろす真希。

○同・同・ダイニングキッチン（朝）

朝食の準備をしている、着替えてエプロン姿の真希。

溶いた卵をフライパンに流し込む真希、油のはねる音がする。

スマホのアラームが鳴る。

火を止める真希、コップを手に取り、浴室へ向かう。

○同・同・浴室（朝）

浴槽に昨日のお湯が残っている。

やってくるると何の迷いもなくコップに残り湯を掬う真希。

○同・同・寝室（朝）

コップを手に入ってくる真希。

真希「おはよー。時間だよー」

カーテンを開ける真希。

唸り声を上げる人見。

人見にコップを差し出す真希。

真希「はい。湯冷まし」

人見「ん：」

起き上がる人見、コップを受け取って飲む。

ゴクゴクと飲みほす人見の姿を見ている真希、笑顔。

○同・同・ダイニングキッチン（朝）

朝食を食べているワイシャツ姿の人見。新聞を持ってきて人見に渡す真希。

真希「はい。朝刊ね」

無言で新聞を広げる人見。

床には人見の脱ぎ散らかしたパジャマ。脱いだパジャマを拾う真希。

○同・廊下（朝）

人見家のドアが開き、出てくる背広の人見。

見送る真希。

真希「行ってらっしゃい」

人見「あれ？俺のマフラーは？」

キョトンとしてみせる真希。

真希「え？昨日ソファアの背のところにかけてたでしょ？」

人見「あったか？」

隣のドアから出てくる奏。

真希「あ、おはようございます」

奏「どうも」

人見を小突く真希。

真希「（囁き）お隣に越してきた小桜さん」

人見「ああ、おはようございます」

人の良い笑顔の人見。

会釈で返す奏。

人見「時間ないから行くよ。マフラー探しといて」

真希「了解。行ってらっしゃい」

微笑む真希。

行ってしまいう人見。

真希「（奏に）これからご出勤ですか？」

ちらっと真希を見る奏、ドアの鍵を閉めながら、

奏「ええ」

真希「お仕事はどんな？」

奏「（遮り）それ、乗ってかないんですね」

奥に寄せられたマウンテンバイクを目
でさす奏。

真希「（苦笑し）先週パンクしたらしくて」

奏「そうですか」

さっさと行ってしまおうとする奏。

真希「あの」

奏「（振り返り）何か？」

真希「後で、何か引越しのお手伝いできるこ
とがないか伺おうと思ってたんです。ご家

族は今日ご在宅かしら？」

奏「私一人なので、同居人はいません」

真希「え…」

奏「基本必要なことはプロに任せますし、仕
事は家でやるので、他人に上がられると邪
魔ですから、気にしないでください」

あっけにとられている真希。

奏「打ち合わせに遅れるので、失礼します」

真希「あ：ごめんなさい。呼び止めて」

さっさと行ってしまおう。

取り残される真希、しかしすぐに気を取り直す。

真希「そうだ。忘れないうちに」

ドアについている郵便受けから、隠していた人見のマフラーを出す真希。

○同・人見家・トイレ

トイレ掃除をしている真希。

便座カバーやトイレマットは外し、便座や床を人見のマフラーで丁寧に拭く。流行歌を口ずさみながら、せっせと掃除に励む真希。

一通り拭き終わると、満足げに息をつく真希。

真希「よしっ」と

○同・同・洗面室

洗濯機にトイレマットや便座カバーを

投げ込む真希。

給水ホースで浴室の湯船から、残り湯を汲み出している。

真希「あと残り湯洗濯するものは……」

思い出したように人見のパジャマや衣服を突っ込む真希。

真希「汚物、他にもあったっけ」

出ていく真希。

○同・同・ベランダ

綺麗に干されている人見のパジャマ、トイレマット、便座カバー。

○同・同・ダイニングキッチン

のんびりコーヒーを飲んでいる真希。インターホンが鳴る。

○同・廊下

小桜家のドアの前に立ち往生している学ランの小桜圭吾（17）とランドセ

ルの小桜亭（7）。

人見家のドアを開ける真希、宅配便の業者が待っている。

宅配便業者「人見篤様宛です」

真希「ご苦労様です」

荷物受け取りのサインをする真希。

宅配便業者が行ってしまう。

大きなダンボールに困り顔の真希。

真希「一体なに頼んだんだか…」

携帯電話片手にイライラしている圭吾。

圭吾「かなのやつ、なんで家にいねえんだよ」

ドアを閉めようとしていた真希、ためらってから声をかける。

真希「あの、小桜さんならお仕事いかれましたよ」

たよ

真希を見る圭吾。

圭吾「お隣さんですか？」

パツと笑顔になり駆け寄る圭吾。

圭吾「助かった！俺ら、小桜奏の弟なんですけど」

真希「弟？」

亨を無理やり引っ張る圭吾。

圭吾「こっちは末っ子の亨です」

亨の頭に手を乗せ、下げさせる圭吾。

微笑む真希。

真希「こんにちは」

圭吾「その〜。大変恐縮なんすけど…」

じっと真希を伺う圭吾。

真希「はあ」

圭吾「亨のこと預かってくれませんか」

真希「え？」

圭吾「こいつの小学校がインフルエンザで学級閉鎖になって。でも母ちゃんはもう仕事に行っちゃって居ないし、俺は学校あるし、一人で家に置いとけないんです」

真希「いや。でも私も小桜さんにお会いしたのは昨日が初めてで…」

圭吾「こいつは健康です！予防接種バッチリ！だから、お願いします！」

真希「そちらだって、こんな赤の他人に弟さ

んを預けるんじゃない、心配でしょ？」

圭吾「いや！俺にはわかります！」

真希「は？」

圭吾「あなたはいいい人です。きっと」

真希「そんなてきとうな……」

パンと手を合わせる圭吾、頭を下げ、

圭吾「お願いします！」

戸惑う真希。

○同・人見家・ダイニングキッチン

座っている亨。

クッキーとチョコを出す真希。

真希「うち、甘いものならたくさんあるの。

好きなだけ食べてね」

亨の前に座る真希。

亨「いただきます」

手を合わせてから、クッキーを手に取る亨。

真希「偉いね。ちゃんといいただきますが言えるって」

亨「…かなが、いただきますとごちそうさま
の言えないやつに、出されたものを食う資
格はないって」

ふっと黙る真希。

洗濯機の音が鳴る。

我に帰り、立ち上がる真希。

真希「（亨に）ちよつとごめんね」

○同・同・廊下

洗濯された衣服などが入ったカゴを持
って、洗面室から出てくる真希。

真希「2回洗濯ってやっぱ、めんどい…」

先ほど宅配されてきたダンボールが、
壁に立てかけられたままなのに気づく
真希。

カゴを置くと、ダンボールの品書きを
見る真希。

真希「…」

出てくる亨。

亨「すいません」

ハッとする真希。

真希「なあに？」

亨「トイレ使っていていいですか？」

真希「ああ、はいはい。こっちよ。ちょうど
お掃除したところ」

亨をトイレに案内してやる真希。

インターホンが鳴る。

ドアを開ける真希。

ズイズイと入ってくる奏。

奏「どうも、亨がお邪魔してます？」

押し切られそうになって慌てて止める

真希。

真希「こんにちは。お仕事からもう戻られた
んですか」

奏「上の弟から連絡入ってたんで。（呼びか
け）亨！いるの！？」

手をハンカチで拭いながら出てくる亨。

亨「かな」

ホッとしたような奏。

○同・廊下

人見家から出てくると頭を深々下げる
奏。

奏「お世話になりました。…亨？」

亨「お邪魔しました」

奏に倣って頭を下げる亨。

微笑む真希、奏に紙袋を差し出し、

真希「これ。余計かもしれないけど、よければどうぞ」

奏「…？」

受け取る奏。

真希「昨日越してきたばかりだと、なかなか
お食事まで手が回らないでしょ？よかつ
たら、召し上がってください」

紙袋にはおかずの入ったタッパーがい
くつか。

奏「…ありがとうございます。でも、大丈夫
です」

真希に紙袋を返す奏。

呆気にとられる真希。

真希「遠慮しなくても…」

奏「遠慮ではなくて、いらななんです」

怪訝な顔になる真希。

奏「弟預かっていたいただいて、こんなこと言える立場じゃないって承知してます。でも私、ご近所付き合いするつもり、ないんです」

奏の手を握っている亨、じっと真希と奏の横顔を見上げている。

真希「…ずいぶん、はっきり言うんですね」

奏「ちゃんとお伝えしないとフェアじゃないので」

深々頭を下げる奏。

奏「失礼します」

亨の手を引いて隣の家に戻っていく奏。手を振る亨に、そっと返す真希。

ドアが閉まる。

真希「…私とは、違うな」

悲しげに笑う真希、自身も家に入る。

○同・人見家・玄関

ドアにもたれて廊下を見つめる真希。
壁に立てかけられたダンボール。
ため息を吐く真希。

○同・同・ダイニングキッチン（夜）

洗濯物をたたんでいる真希。

帰宅してくる人見、嬉しそうにダンボールを持ってくる。

真希「おかえり」

人見「これこれこれ！待ってたんだよ」

真希「お疲れ様。遅かったね」

上着を脱ぎ捨てる人見。

立ち上がる真希。

真希「ご飯、準備するね」

人見「え？食ってきたよ？メールしただろ」

真希「え？」

慌ててスマホを確認する真希。

真希「見てなかった…、会社の人？」

人見「いや？一人だけど」

ダンボールの箱をハサミで開ける人見。

人見「たまにはお前にも、サボらせてやんな
いとつて思ってたさ」

顔が引きつる真希。

真希「なら、私もあなたの会社の方まで行け
ば良かったね」

人見「え？なんで？」

キョトンとする人見。

真希「…私、自分のご飯の準備するね」

人見「おう。のんびり食えよ」

ダンボールから、マウンテンバイクの
タイヤを出す人見。

人見「見ろよ。最新型の素材で、穴が開くと
自動修復するタイヤだってさ！」

付随のパンフレットを手に生き生きと
語る人見。

台所に立つ真希。

二人分の夕飯の皿が、ラップされてあ
とは出すだけになっている。

人見「俺の工具箱どこだっけ」
立ち上がる人見。

ため息をつき、片方の料理を冷蔵庫に
しまう真希。

人見「明日からまた自転車通勤にするから、
5時に起こして」

真希「…了解」

新しいタイヤと工具箱を手に行ってし
まう人見。

○同・同・寝室（夜）

いびきをかいて眠っている人見。
ベッドの隣は空。

○同・同・ダイニングキッチン（夜）

薄暗い室内。
テーブルの上には、豚の陶器と、散ら
ばるお菓子の包み紙。

○同・廊下（夜）

人見家から出てくる真希、手には人見
の工具箱。

周囲を気にしつつ、人見のマウンテンバイクの前にかがむ。

工具箱からチェーンカッターを出す真希。

自転車にかがんで、そっとチェーンに切り込みを入れようとする真希。

ガチャつとドアが突然開き、小桜家から出てくる奏。

ギョツとして振り返る真希。

奏「…！」

驚く奏。

真希「あ…こんばんは」

慌てて立ち上がり、微笑む真希。

奏「…こんばんは」

真希とマウンテンバイクを交互に見る

奏、不審げな表情。

笑顔を崩さない真希。

真希「この時間からお出かけですか？」

奏「…食事を買いに」

真希「コンビニ、ここからだど20分は歩き

ますよ？スーパーは閉まってる時間だし」

奏「…」

真希「やっぱり昼間、私の厚意を受け取ればよかったのに」

奏「…」

思わず言ってしまったという風に、ハッと口ごもる真希、目を伏せる。

真希の手に握られたチェーンカッターに、目を止める奏。

視線に気づき、さっと後ろに隠す真希。じっと見合う、真希と奏。

真希「…」

奏「…」

ふっと目を伏せる真希、小さな声で、

真希「…主人には、言わないでください」

真希を見つめる奏。

奏「…昼間も言いましたけど、私は近所付き合いです、するつもりないです」

真希「…」

奏「ただ、自分の行動には、自分しか責任は
取れないですよ」

笑顔が消え、顔がこわばる真希。

会釈して行ってしまおう奏。

立ち尽くす真希、マウンテンバイクに
視線を移す。

チェーンカッターを握る真希の手に、
力がこもる。

駆け出す真希。

○同・前（夜）

自動ドアのエントランスから出てくる
奏、寒そうに肩をすぼめる。

真希「（叫び）待って！」

かけてくる真希、閉まりかけた自動ド
アを無理やり開けて、奏に追いつく。

驚き振り返る奏。

真希「勘違いしないで！」

息の荒い真希。

奏の腕を掴む真希。

真希「ただ、チェーンに：チェーンに切り込みを：」

言いながら咳き込む真希。

啞然としたままの奏。

息も荒いまま、奏にまくし立てる真希。

真希「：あなたにわかる？あの人、自転車通勤に戻れば、いつもより1時間早く起きることになる。私はあの人を起こして、準備をさせて、ご飯を与えないといけないから、さらに早く：。4時起きよ？なのに、あの人はいつも遅く帰ってきて、ご飯の準備ができてないと不機嫌。先に寝るなんて許されない」

奏「（戸惑い）あ：」

真希「私が専業主婦だから仕方ないってわかってる。でも、私はあの人を食べたり脱いだりしたものをいつも、毎晩：」

膝から崩れ落ちる真希、過呼吸になる。

奏「ちよつと！大丈夫ですか！？」

慌てて真希の肩を抱く奏。

胸を押さえて苦しそうな真希。

○同・小桜家・ダイニングキッチン（夜）

どことなく散らかった室内。

肩身が狭そうに膝を抱えて座っている

真希。

人見の工具箱を手に、入ってくる奏、

もう片方の手には、小さいペットボト

ルのミルクティーが二本。

工具箱を部屋の隅に置く奏。

奏「落ち着きました？コンビニまでは行って

られないんで、ロビーの自販機ですけど」

奏から、ミルクティーを受け取る真希、

両手で包み込むと、

真希「あったかい…」

真希の向かいに座る奏、自分のミルク

ティーを飲む。

真希「ごめんなさい。…その、部屋にあげて

もらっちゃって」

奏「あんな寒空の深夜に、過呼吸の人放って

けないじゃないですか」

下を向く真希。

溜息をつく奏。

奏「あの工具箱、広げたまま廊下にあったんで、いちお回収しました」

真希「ありがとうございます」

無言になる真希。

立ち上がる奏、寝室の方に行ってしまう。

真希「…」

しばらくして、ドアをお尻で開けると、布カバーを両腕に抱えて戻って来る奏。呆氣にとられる真希。

真希の前にあるローテーブルに、布のカバーを設置する奏。

テーブルがコタツ仕様になる。

奏「はい！スイッチ入れましたから、足入れてください！」

驚く真希。

奏「そんな寒そうな顔されたままだと、帰れ

とも言えないじゃないですか。一回あつ
たまつてください」

怒り口調の奏に急かされて、足を入れ
る真希。

奏「ほら、肩まで布引き上げちゃつてくださ
い。それか寝転んでもいいです。私は寝転
びますよ！寝転んで、仕事します！」

コタツに体を入れて、ボタンと寝転ぶ
奏、アイパットを手にすると、イラス
トを描き始める。

イラストは森の絵、雷雨の嵐の様子。

奏「：これで、私は、直接あなたの顔が見え
ないんで、顔色なんか伺えません。あなた
も、私なんていないように独り言でも泣き
言でも話せばいい。黙りたければ、黙れば
いい」

真希「…」

真希から見える、デジタルでイラスト
を描き上げている奏の横顔。
ためらいがちに、首を伸ばす真希。

真希「…絵、うまいんですね」

奏「うまいも何も、仕事ですから」

真希「イラストレーターさんなんですか？」

奏「ゲームのコンセプトアートとかがメインだけど、パッケージとかもちよいちよやってます。広く言えばイラストレーターですね」

真希「すごい。私の半分くらいの年齢でしょ？それで、このマンションで一人で暮らせるくらい稼いでるって…売れっ子ですね」
ふっと鼻で笑う奏。

奏「結構稼いでるけど、流石に2LDKのマンションは買えません」

一瞬、言葉を切る奏。

奏「この部屋は、母親の遺産を相続したただけです」

アイパッドを置くと、起き上がる奏。

奏「ここで言う母親ってのは、私の産みの母親ですよ？昨日あなたが会った弟たち2人は、また別で、今の母親が生んだんです」

察したように頷く真希。

奏「今の亨くらの頃から育ててもらったけど、私に気を遣って、何でもかんでもやってくれる人で。代わりに私も何でもかんでも気を遣わなきゃいけないし、この歳でろくに家の事もできない箱入りになったから。たまたま空いた、別の箱に移動したんです。要は自立です」

じつと奏を見つめる真希。

しばしの間。

真希「ありがとう」

ちらつと真希を見る奏。

奏「何がですか？」

真希「私が自分の話をしやすいように、あなた、自分の話をしてくれたんでしょう？」

ムツとした顔になり、アイパッドを手にする奏。

視線を画面に落として、無言でタッチペンを走らせる奏の様子を見て、緩んだ笑顔になる真希。

真希「…私、夫が多分、嫌い」

穏やかな笑顔のまま、ポツリポツリと
話す真希。

聞いていない風で、作業を続ける奏。

真希「私は、結婚は対等な契約だと思ってた。
でも、彼にとっては、私は母親か、召使い
か、奴隷か…その時々で、自分に都合のい
い人間でしかない」

ペットボトルの蓋側面を、爪でギリギ
リとひっかく真希。

真希「でも、一番確かに嫌いなのは、自分」

遠い目の真希、ゆっくりと、

真希「言われたことをやってしまう自分。笑
顔を作ってしまう自分。毎晩こっそり、あ
の人のお金で買ったお菓子を貪り食べて、
溜まりに溜まった暴言を書き溜めたり、姑
息な仕返しをする、不満で肥えた、飼育さ
れた豚みたいな自分」

息を吐き出す真希。

真希「私、前はこんな醜い人間じゃ、なかつ

たの。もうずっと昔で思い出せないけど……」

息を吐き出す真希、短い呼吸を繰り返す。

顔を上げる奏、くるつとアイパッドを真希の方に向け、差し出す。

雷雨で吹き荒れる森林のイラスト。

奏「これ、主人公が決戦のステージで嵐になるシーンなんです」

真希「……？」

奏「私、下絵を描いたとき、この雲に覆われる前の、静かな森と空を先に描きました」

嵐の描写を描いたレイヤーを、非表示ボタンを押して消す奏。

パッと現れる、同じ構図の下絵、青空と白い雲、輝く太陽、のどかな森の風景。

驚く真希。

奏「この黒い雲は、爆発寸前にためこんだ雷と雨をひとしきり振り落としてるんです。そうしないと、覆ったものがまた顔を出せ

ない。これ、人間の感情と似てますよね」

顔を上げる真希。

奏「雲の奥にはちゃんと本来の、醜くなる前の自分があるんじゃないですか？」

真希「…」

奏「夫婦関係が雨降って地固まるかはわからないですけど、旦那さんに全部吐き出せば、少なくとも、隠れてる素顔はとりもどせるんじゃないですか」

再度、奏の絵を見る真希。

○同・人見家・寝室（朝）

まだ外は薄暗い。

ベッドで眠りこけている人見。

傍に立つ真希、手の中のスマホが、

「4時」を差し、アラームが鳴り出す。

赤ん坊の泣き声のアラーム音。

人見の布団をはぐ真希。

身震いして起きる人見。

人見「なんだ…」

真希「起きて」

人見「何？この音、赤ん坊？」

真希「赤ちゃんの夜泣き。もう何年も、アラ

ームはこの音にしてるの」

充電器にさしていた自分のスマホをみる人見。

人見「（舌打ち）まだ4時じゃん。5時に起きるって言っただろ」

再度、布団をかぶる人見。

布団をはぐ真希。

人見「なんだよ！：なんかあったのか？」

真希「嵐を起こすのよ」

呆気にとられ、自分を見下ろす真希と見つめ合う人見。

○同・同・ダイニングキッチン（朝）

向かい合って座っている、人見と真希。

真希のスマホから鳴り続ける、赤ちゃんの泣き声。

人見「：なあ、それ止めてくれない？なんか

頭痛くなってきた」

真希「毎朝鳴らしても、あなたは一度も、この音で起きなかったじゃない」

人見「働いて疲れてんの。それに、朝はちやんと起きてるだろ」

真希「私が起こしてるものね」

アラームを切る真希。

怪訝な顔になる人見。

人見「なんだよその言い方。そもそも、こんな朝早くに起こされて、俺怒ってんですけど」

立ち上がる真希、無言で台所に行くと、シンクの下戸棚から、豚の陶器を出して戻ってくる。

どん。と置かれた豚の陶器に呆気にとられる人見。

人見「何これ」

さらに廊下から、工具箱を持ってくる真希、中からカナヅチを取り出す。状況の読めない顔の人見。

躊躇なく振り上げ、豚の陶器に頭から
振り下ろす真希。

ギョツとして仰け反る人見。

人見「ワッ！」

すごい音を立てて、豚の陶器が粉碎さ
れて、中から数十枚のメモが流れ出る。
思わず尻餅をついている人見。

人見「（ビビりながら）なんなんだよ！？」

カナヅチを持ったまま、人見を見る真
希。

真希「…」

思わず頭を隠す人見。

カナヅチをテーブルに置く真希。

真希「結婚式で、あなたの上司の…江上さん
がおっしゃったこと。覚えてる？」

人見「は？…江上本部長？」

真希「結婚生活では、三つの袋を大切にしな
さいって」

ゆっくりと椅子に座る真希。

よくわからないまま、椅子に座る人見。

人見「ああ…、祝辞の定番だろ？ええと…、

堪忍袋、お袋：あと…（考え）」

向かい合う人見と真希。

真希「給料袋」

人見「そうそれ」

息をつく真希。

真希「給料袋に関しては、あなたは、なんの問題もなくお金を稼いで来てくれる。私はパートをしているけど、その時給は、特に生活の足しにしなくても構わないから、私の自由にできるよね」

人見「（頷き）そ、そうだな」

真希「でも、逆にあなたも自分で稼いだお金を自由に使う」

怪訝な顔になる人見。

真希「あの給料袋って、夫婦の財って意味があるの。だけど、お金を使うとき、あなたは何にも私に相談してくれない」

頭をかく人見。

人見「…なんだ。タイヤ買ったの怒ってるの

か？あれはそんな高く：」

真希「値段の問題じゃないの」

人見「俺の稼いだ金だろ。多少好きに使っ

たって、うちには子供も」

だん！とテーブルに手をつく真希、言葉
葉を切る人見。

テーブル上に散らばっていた豚の陶器
のカケラで、真希の手から血がにじむ。
気にも留めない真希。

真希「私は、あなたが、うちには子供がいな
いんだしっていうの、大嫌いだった」

人見「お、おい。手から血が：」

真希「お袋もそうよ」

人見「え？」

真希「あなたは、自分の母親をととても大切に
してるし、私だって、あなたのお母さんだ
から、大切にしたわ」

一呼吸置く真希。

真希「でも、あなたは私の家族を大切にしてくれ
なかった」

ムツとする人見、声を荒らげ、

人見「なんでそうなるんだよ！」

真希「（返して）私の母に、母の日や誕生日にプレゼントを贈ってくれたことが、あなたにはあった？」

つまる人見。

真希「私の実家に行ったとき、座っている以外のことを、あなたは何かした？」

人見「…」

真希「…私はしたわ。あなたの家族の記念日は全部覚えてる。あなたの実家の台所のことも、掃除道具のことも、全部知ってる。20年以上住んでいたあなたよりも、ずっと」

視線を泳がす人見、歯切れ悪く、

人見「それが、それが嫁だろ！そんな少しくらいの我慢で…俺だって、仕事してんだ！」

真希「（叫び）だから！我慢してたんじゃない！
い！」

拳を握りしめる真希、血が滲み出す。

真希「この豚の口に、言いたいことも嫌だったことも、絶望したことも、傷ついたことも、全部全部突っ込んで飲み込んで、消化不良のまま胃袋に溜め込んで…」

拳のまま、何度もテーブルを叩く真希。

真希「イライラを抑えるのに、夜中にお菓子食べちゃって…子供も産んでないのに私、結婚してから7キロも太っちゃった！」

人見「（啞然と）はあ？」

真希「（怒鳴って）まだ42なのに、生理止まるし。医者に診てもらったら、ストレスで更年期が早まってるって…」

下を向いて、涙が反動で落ちていく。

言い返したいが、うまく言葉が出てこない様子で、もたつく人見。

人見「おま、そんな、そんな不満だってんならな。もう…もう…」

立ち上がる人見。

人見「もう、勝手に出てけ！」

顔を上げる真希、涙目。

見合う人見と真希。

スーとこわばっていた肩を落とす真希。

真希「わかった」

人見「…」

立ち上がる真希。

真希「ありがとう」

袖で涙を拭うと、廊下へ向かう真希。

○同・同・洗面室（朝）

やってくる、顔と血だらけの手を洗う真希。

真希「…痛っ！」

手の傷を見る真希。

○同・同・ダイニングキッチン（朝）

廊下から戻ってくると、そのまま寝室に入っていく真希。

立ち尽くしていた人見、我に帰って、慌てて寝室に駆け込む。

○同・同・寝室（朝）

救急箱を取り出す真希、ベッドに座り
手早く応急処置を始める。

勢いよく入ってくる人見、しかしどう
声をかけたら良いか迷う。

真希「救急箱の場所、知らないわよね」

ぎくつとする人見。

真希「なんかあったとき不便だろうから、こ
こに置いておくわ。好きなどこしまつて」

応急処置が終わり、立ち上がる真希、
クローゼットからボストンバッグを出
す。

引き出しを開け、手早く服を詰め始め
る真希に、戸惑う人見。

人見「おい。何やってんだよ」

真希「はじめだから、私のパート代で買った
もの以外は置いていくわ。売るなり捨てる
なり好きにして。ゴミの日は間違えないで
ね。自治係がうるさいから」

人見「…出てって、どうするんだよ。パート

代じゃ、生活なんてできないぞ」

立ち上がる真希。

真希「できるわよ。私一人くらい」

ニコツと笑顔になる真希。

真希「幸い、子供もいないしね」

無言になる人見。

○同・廊下（朝）

出てくる真希。

玄関口まで追いかけてくるも、かける言葉の見つからない人見。

そのままドアを閉めようとして、ふと手を止める真希。

真希「そうだ」

人見「な、なんだ!？」

真希「ごめんなさいね」

笑顔で振り返る真希。

真希「マウンテンバイク、先週私がアイスピックでパンクさせたの」

驚く人見。

真希「あと、チェーンも修理するまでは、乗らないほうがいいわよ」

人見「：お前」

真希「走行中に事故って死なれたら、私が殺人罪になっちゃうものね」

笑う真希。

顔の青ざめる人見。

ドアを閉める真希、息をつく。

歩き出す真希、一度は隣の小桜家の前を素通りするも、ふと振り返る。

真希「：」

少し考える真希。

○同・小桜家・ダイニングキッチン

仕事中にコタツで眠ってしまったらしき奏、目覚める。

奏「寝落ちか：」

コタツから出る奏。

奏「腹減った：」

台所の冷蔵庫を開く奏。

空っぽの冷蔵庫。

奏「コンビニ行き損ねたんだった！」

シンクのところに置かれた、空のミル

クテイーのペットボトル2本。

ちゃんと水ですすがれ、ゴミが分別されて
れている。

ペットボトルに目を止める奏、手に取
り、

奏「洗って分別とか、あのおばさん真面目か
よ」

笑う奏。

奏「（気を取り直し）なんか食べに行くか」

インターホンが鳴る。

キョトンとする奏。

○同・同・玄関

ドアを開ける奏、ギョツとする。

両手いっぱいのスーパリーの袋を下げた

真希。

真希「おはよう！」

奏「何。あんた…」

真希「入れて入れて！旦那の出勤時間なの！

さつき家出したばかりなのに、出くわした
ら気まずすぎる！」

中に入って来る真希

○同・同・ダイニングキッチン

手早く料理をしている真希。

黙ってコタツにいる奏。

真希「昨日結局私のせいで、何にも食べてな
いんじゃないかなって思って、気になっ
たのよ」

奏「：別に、気にしなくてもいいんですけど」

オムライスを皿にのせる真希。

真希「はいできた」

奏の前に、湯気の立つオムライスを出
す真希。

怪訝な顔の奏、しかしお腹が鳴る。

思わず笑う真希。

決まりが悪そうに、手を合わせる奏。

奏「いただきます」

真希「…召し上がれ」

スプーンでオムライスを崩すと、口に
運ぶ奏。

奏「…！美味しい…」

顔が緩む奏。

真希「…嬉しいな」

奏「え？」

真希「もう何年も、いただきますも、美味し
いも、言われなかったから」

頬杖をつく真希。

真希「でも、私があの人に言ってた、お仕事
お疲れ様とか、ありがとうって言葉は、自
分に返して欲しくて言っていた気がする」

吹っ切れたように笑う真希。

真希「ちよっぴり反省！」

オムライスを頬張る奏、間を置き、

奏「これから、どうするんですか？」

真希「ん？私？」

考える真希。

真希「実家は広島だけど、多分帰らないかな。

弟夫婦がいるし」

奏「離婚、するんですか？」

真希「（迷わず）うん」

奏「金銭面は？」

真希「清掃のパートやってるけど、それだけ

じゃ長くは無理ね。今度は本物の家政婦に

でもなろうかしら。住み込みとかで」

冗談っぽく笑う真希。

オムライスを食べ続けながら、ぶつき

らぼうに言う奏。

奏「しばらくなら、ここに住んでもいいです」

呆気にとられる真希。

奏「ご飯と掃除、してくれるなら、家賃光熱

費タダで」

目をパチクリして、呆気にとられてい

る真希。

真希「在宅仕事だから、他人が家に上がるの、

嫌なんでしょ？」

奏「他人が勝手に世話焼いてきて、恩着せが

ましくされるのは嫌ですけど、プロが仕事としてやってくれるならいいです」

真希「でも…」

奏「今ちようど新しい案件の仕事がきて、忙しいんで。新生活のことやってくれる家事代行、雇うつもりだったんです」

笑う真希。

真希「家のことをできるようになりたくて、一人暮らし始めたんじゃないの？」

奏「向いてないって3日でわかりました」

真希「諦めるのはや！」

奏「私は、対等な関係ならいいんです」

食べ終わる奏。手を合わせる。

奏「その点、あなたがいきなり宿無しになったのは、昨日私が言っちゃったことが少なからず関係している負い目も私にはあるし、あなたが路頭に迷わないことでそれが緩和されて、なおかつあなたが家のことをやってくれば御の字です。大金持ちじゃないから、生活費補助のほかは、お小遣い

程度のお給料ですけど」

笑う真希、チキンライスで赤くなってしまうた奏の口元を、ティッシュで拭いてやる。

真希「ケチャップ」

ムツとして、ティッシュを受け取り、口を拭う奏。

真希「…近所付き合い、しないんじゃないかっ
たの？」

奏「家出した人なら、もう近所じゃないです」
呆れたように笑う真希。

真希「ありがとう。そうさせてもらえると、
とても助かる」

真希を見る奏、ホツとした様子。

真希「私も、お隣さんとの近所付き合いは控
えるだろうけどね」

笑う奏、手を差し出す。

笑う奏、ティッシュを脇へ放る。

握手する真希と奏。

空になった奏の皿を手に、立ち上がる

真希、台所へ向かう。

奏「（呼び止め）あ」

振り返る真希。

奏「ごちそうさまでした」

微笑む真希。

真希「お粗末様でした」

お皿をシンクに置く真希、洗い始める。

アイパッドを手に取る奏、イラストを

描き始める。

アイパッド画面には、嵐が去り、虹の

かかる青空と白い雲、雨粒に太陽の光

が反射し、輝く森林が描かれている。

〈了〉